

「ラストピース」

第
11

話

水
瀬
真
理
佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（9）（18）大学1年生
鈴木理菜（3）（18）大学1年生
高橋湊（23）理菜のアパートの隣人
花村夏凜（18）理菜の親友
市川拓也（18）理菜の親友
西原圭吾（18）市川の友達
成宮翔（18）市川の友達
白水透（54）バーのマスター
佐々木俊哉（45）ニュースサイトの編集長
塚目凜子（34）護身術の師範
前田明日香（29）理菜の実の母
鈴木健一（41）理菜の育ての父
鈴木香澄（41）理菜の育ての母
阿部宏樹（58）理菜の主治医
奈良坂壮一（26）（35）元長野県警
奈良坂泉（35）奈良坂の妻
奈良坂千夏（8）奈良坂の娘
竹内魁（20）高橋の兄
吾妻豊（46）（55）長野県警

吾妻美枝子（51） 吾妻の妻
阿部美里（49） 阿部司の母
阿部司（29） ？
阿部樹（24） 阿部司の弟

○アパート・理菜の部屋の中

鈴木理菜（１８）、鏡の前で化粧をしている。

外から聞こえるパトカーと救急車のサイレンに、何事かと怪訝な顔をする。

○港区の住宅街・小山家

広い庭のある洋風の一軒家。

門の外には規制線が張られ、警察官が立っている。

近くにはパトカーや救急車が止まり、野次馬やマスコミで人だかりができる。

警察官「押さないくださいーい！」

リポーター「こちら現場には規制線が張られ、中の様子を確認することはできませんが、次々とパトカーが到着し、現場は物々しい雰囲気になっています」

と、カメラに向かって中継。

理菜、集団の後ろの方で背伸びして様子を伺う。

理菜「あの、何があったんですか？」

と、隣の婦人に尋ねる。

婦人、言いつらそうに、

婦人「（小声で）家の中で家族全員亡くなつてたらしいの」

理菜「え……」

と、目を大きく見開く。

婦人「全員刃物で滅多刺しにされて……血だらけだったみたいよ」

理菜、腰が抜けて地面に座り込む。

婦人「ちよつと、あなた大丈夫！？」

理菜は呼吸が荒くなり、周りの音が遠くになっていく。

なんとか立ち上がるが、顔は真っ青で、足元もおぼつかない。

倒れそうになるのをある青年が支える。

青年「ねえ、大丈夫？」

理菜「ハアッ、ハアッ、ンハアッ……」

理菜はそのまま意識を手放す。

○公園（朝）

青年の歌「ロンドン橋落ちる、落ちる、落ちる。
ロンドン橋落ちる、マイ・フェア・レディー」

※ ※ ※

（フラッシュ）

理菜の母・前田明日香（29）と中学
生くらいの男子がピアノの前に並んで
座り、ロンドン橋落ちたの曲を連弾し
ている。

それを横で見ている理菜（3）。

※ ※ ※

ベンチで横になっている理菜、青年の
歌で目を覚ます。

青年「あ、起きた」

理菜は辺りをキョロキョロする。

青年「近くの公園だよ。突然倒れたから運ん
であげた」

理菜「すみません……ありがとうございます
た」

青年「どういたしまして」

理菜は男を凝視する。

20代くらい、色白の青年。

口元にホクロがある。

理菜「あの、さっきの歌……」

青年『ロンドン橋落ちた』ね。この曲大好きなんだ」

青年の狂気じみた笑顔に理菜の背筋が凍る。

青年「どうかした？」

と、顔を近づける。

理菜が青年から距離をとろうとした時、

高橋湊（23）がやってくる。

高橋「理菜！」

理菜はスッと立ち上がって高橋の方に行き、高橋の手を握る。

高橋「ありがとうございます。あとは俺が」

青年「（ケロッと）それじゃあ、お大事に」

と、あっさり去っていく。

高橋「何かされた？」

理菜は首を横に振る。

高橋「ごめん遅くなって」

と、理菜を抱きしめる。

理菜「来てくれてありがとう」

高橋「帰ろ。今日は家にいた方がいい」

高橋の腕の中で頷く理菜。

○アパート・理菜の部屋

ベッドで眠る理菜。

高橋、床に座って理菜の手を握る。

○バー・店内（深夜）

客は誰もいない。

タブレットを囲み、深夜のニュース番

組をみている高橋とマスター・白水透

（54）。

アナウンサー「今朝東京都港区の住宅で、一家が殺害されていることが分かりました。殺害されたのは小山淳平さん、妻のみちるさん、息子の墨斗くんの3人で、死因は刃

物による失血死ということが明らかになっています。警察は何者かが小山さん宅に押し入り殺害したと見て捜査を進めています」

高橋「これでハッキリした。アイツは確実に理菜を狙いに来てる。現場の近さからして、多分もう……」

と、怖い顔をして拳を握りしめる。

白水「こら。眉間に皺、寄ってんぞ」

と、高橋の額にデコピンをする。

高橋「！」

白水「大丈夫。俺も、佐々木も、凜子だっている」

高橋「ですね」

白水「理菜ちゃんの様子はどうか？」

高橋「かなり動揺してました。当然9年前のこととも思い出しただろうし、犯人が近くに
いるかもしれないって恐怖もあるだろうし
……」

白水「そうか……ここからが正念場だな」

○（理菜の夢）白い世界

高橋「理菜！」

と、にこやかに手を振る。

理菜「湊くん！」

と、嬉しそうに駆け寄る。

突然、高橋が背後から刃物で刺されて倒れる。

白い地面に広がる血。

理菜「湊くん……ねえ、湊くん！　しっかりして！」

理菜、床に座り高橋を腕の中に抱いて声をかける。

高橋「う……しろ」

理菜が後ろを振り返ると、育ての父・鈴木健一（41）、母・鈴木香澄（41）、親友・花村夏凜（18）、市川拓也（18）、同級生・西原圭吾（18）、成宮翔（18）、白水、編集長・佐々木俊哉（45）、師範・塚目凜子（34）が血を流して倒れている。

理菜「（絶望の表情で）そんな……なんで

……」

理菜に近づいてくる足音。

青年「ロンドン橋落ちる落ちる落ちる」ロン

ドン橋落ちる」♪」

と、歌いながら全身黒い服装の男が理菜の前にしゃがみ込む。

青年「マイ・フェア・レディ」

と、口角を上げる。

口元のホクロが特徴的。

男は血のついた刃物を持っており、全身には返り血がべっとりついている。

（理菜の夢終わり）

○アパート・理菜の部屋の中（深夜）

理菜「はっ！！」

と、ベッドで勢いよく起き上がる。

額にはびっしり汗をかいていて、肩

で息をする。

暗い部屋の中を見渡すがいつも通り。

理菜「はあ……」

と、息を吐いてベッドから出る。

「鈴木理菜様」と書かれた薬袋から錠剤を取り出し水で流し込む。

ベッドには入らずブランケットを肩にかけ、床に体育座りして丸くなる。
テーブルの上には空になった錠剤のシートが散乱。

○総合病院・精神科・診察室

医師・阿部宏樹（58）の話を聞く理菜、鈴木、香澄。

理菜「先生、私もしかしたら思い出せるかもしれないんです。9年前の事件のこと！」

理菜の目にはクマができていて、寝不足でハイになっているのが分かる。

理菜の発言に戸惑う阿部。

香澄「ちよっと、理菜」

と、宥める。

阿部「理菜ちゃん落ち着いて。そんなことす

る必要はないんだよ。事件はもう解決して
る。犯人もとつくに捕まってるだろう？」

理菜「違つ……」

鈴木「すみません、気にしないでください先
生」

と、話に割り込む。

しかし理菜は真っ直ぐ阿部を見つめて、
何か言いたげ。

阿部「主治医としてこれだけは言わせてほし
い。必要もないのに無理に事件のことを思
い出そうとするのは危険だ。ダメだよ、絶
対に。分かるね」

理菜「……はい」

阿部「眠剤と不安を和らげる薬。くれぐれも
用量用法は守ること。いいかな」

理菜「ありがとうございます」

阿部「（鈴木と香澄に向かって）お2人は理
菜さんが一番安心できる環境を整えてあげ
てください。ご両親の心配はあるかもしれ
ませんが、なるべく本人の意思を尊重して

あげてください」

鈴木と香澄は顔を見合わせて悩む。

鈴木「はい」

香澄「分かりました」

× × ×

理菜たちが出て行った診察室。

阿部と看護師だけ。

阿部はパソコンでカルテに記録を残している。

看護師「理菜ちゃん気が動転してましたね。

やっぱり似たような事件見ると思い出しち

やうのかな」

阿部「何か他に理由があるのかもね。思い出した理由が」

阿部はカルテに「急性一過性精神病性障害のリスクあり。要経過観察」と入力。

○同・入り口

理菜、鈴木、香澄が自動ドアから出て

くる。

鈴木「車取ってくるから2人はここにいていいよ」

香澄「うん分かった」

鈴木が向かう先に高橋の姿。

理菜「湊くん！」

と、気づく。

高橋が近づいて来て、

高橋「こんにちは」

と、鈴木と香澄に頭を下げる。

鈴木「……どうして君がここに？」

高橋「すみません。理菜さん1人じゃないとは聞いてたんですけど、それでも心配だったので」

鈴木「ボディーガードごっちはよそでやってくれ」

香澄「ちよつと、健一」

と、鈴木を制する。

高橋「ごっこじゃありません。理菜さんは俺が必ず守ります。その覚悟でここに来まし

た」

と、鈴木を真っ直ぐ見る。

高橋を見て、心なしか理菜の表情が和らぐ。

鈴木、その様子を見て、

鈴木「私はまだ君のことも、君の仮説も信じていないんだ。でも理菜は……君の隣にいるのが一番安心できるみたいだな」

理菜「お父さん……」

鈴木「（理菜に）毎日必ず連絡をすること。

それから、何かあったら自分たちだけで解決しようとしないうこと。絶対に約束だから

な」

理菜「うん！　ありがとう！」

高橋「（理菜に）行こう」

理菜、頷いて、

理菜「じゃあまたね」

と、鈴木たちに手を振る。

歩きながら高橋が理菜の手を握る。

香澄、理菜と高橋の後ろ姿を見ながら、

香澄「もしかしたら、お姉ちゃんたちが2人を巡り合わせてくれたのかもねー」

鈴木「（ムキになって）2人が出会ったのは、アイツが理菜のことを探り回ったからだ！運命なんかじゃない！」

香澄「（笑顔で）はいはい分かったから。私たちも帰ろー」

と、鈴木と手を繋いで歩き出す。

○住宅街

手を繋いで歩く理菜と高橋。

理菜「私、古諏訪に行こうと思う」

高橋は驚く。

理菜「こうしてる間にも、本当の犯人は野放しで、罪のない湊くんのお兄さんが罰を受けてる。そんなの絶対許せない。茜ちゃんみたいに、証言を揉み消された人が他にもいるはずだから。私が探し出す」

高橋「ありがとう理菜：でも理菜は十分すぎるくらい無理してるから。時間はないけ

ど、だからと言って焦る必要はないと思っ
てる」

理菜「今まで忘れかけてた記憶がね、少しず
つ私の中に戻ってきてるの。これって、私
自身が思い出したいからなんだよ。古諏訪
に行けば、それが分かる気がする」

湊は理菜の圧に押し負ける。

湊「分かった。俺も一緒に行く」

理菜「ありがとう」

寄り添いながら歩く2人。

○アパート・理菜の部屋（夜）

香澄と通話中の理菜。

理菜「もしもしお母さん。今大丈夫？」

香澄の声「大丈夫だよ。どうかした？」

理菜「今日聞き忘れちゃったんだけど、ふと
思い出したことがあってね」

香澄の声「思い出したこと？」

理菜「ママがね、私の知らない男の子とうち
で連弾してたの。多分中学生くらい。そん

な話ママから聞いたことない？」

香澄の声「さすがにそれだけじゃないとも言えないわね。理菜の幼稚園の友達をよく家に遊びに来てたみたいだけど。ピアノも弾かせてあげてたと思うよ。きっと先生の血が騒いだだろうし」

理菜「先生の血？」

香澄の声「あれ、知らなかった？ お姉ちゃん理菜が生まれる前は家でピアノ教室やってたの。あ、もしかしたらその時の生徒さんなのかも」

理菜「習いに来てた生徒さんたちの名前って分かる！？」

香澄の声「名簿は作ってたはずだから、遺品の中探してみるね」

理菜「ありがとー助かる！」

香澄の声「ねえ理菜。先生にも言われたけど、絶対に無茶しないでね？」

理菜「うん、分かってる。ごめんね心配かけて。私は大丈夫だから」

と、電話を切る。

理菜M『ロンドン橋落ちた』を口ずさんでたあの男の人。あの人に会ってから、なぜかずっと胸騒ぎがする……」

○電車・車内（夜）

スマホで港区のニュースを見ている会社員・奈良坂壮一（35）。
食い入るように画面を見つめる。

○（奈良坂の回想）古諏訪警察署・取り調べ室

T「9年前」

刑事2人が取り調べ中。

取り調べを受けているのは竹内魁（20）。

刑事・奈良坂（26）は記録をしている。

竹内「俺は本当に何もしてません！ たまたま通りがかっただけなんです！ そしたら、

家から出てきた阿部とぶつかって……」

刑事1が机を強く叩く。

刑事1「デタラメ言ってるじゃねえぞ！」

竹内「デタラメなんかじゃない！」

と、意思を持った眼差しで刑事を見る。

○（奈良坂の回想）同・刑事課（夜）

奈良坂がパソコンで作成した調書を見ながら、

奈良坂「とりあえず竹内が言ってた阿部を徹底的に洗いましょう。向かいの家の女の子が見たっていう男は、阿部のことかもしれない」

と、意気込んでいる。

すると、先輩刑事・吾妻豊（46）が横からそのデータを削除する。

奈良坂「何してるんですか！」

吾妻「いいか。お前は何も聞いてない。竹内はひたすら否認し続けてる。それ以上でも以下でもない」

奈良坂「なんで！　これだって立派な目撃証
言ですよ？　事情聞きに行くのが普通じゃ
ないですか！　もしかしたら、竹内は犯人
じゃないかもしれない」

吾妻「……相手が悪すぎるんだよ」

奈良坂「どういうことですか」

吾妻が突然鼻歌を歌い始める。

奈良坂がそれに続いて、

奈良坂「♪阿部建設」

と、口にしてハツとする。

奈良坂「阿部……」

吾妻「阿部は代々古諏訪の大地主なんだよ。

一族でいくつも会社経営してて、阿部建設
とかもそのうちの一つだ。政治家、弁護士、
医者、なんでも揃ってて、どこにでも顔が
利く」

奈良坂が息を呑む。

吾妻「古諏訪は阿部一族のおかげで成り立っ
てると言っても過言じゃない。それくらい、
大事な後ろ盾なんだよ。竹内のたったひと

言だけを根拠に、話なんか聞きに行ってみろ。逆鱗に触れるぞ。阿部家のご機嫌損ねたら困る人間がたくさんいんだよ。まあきつと、うちのお偉いさんも例外じゃない。阿部の家には誰も手出しできないんだよ」奈良坂「でも、だからなんだって言うんですか！　誇りと使命感を持って、国家と国民に奉仕すること、それが警察官ですよ？　俺らがその責務を怠って、一体誰が真実を明らかにするんですか！」

吾妻「覚えとけ。俺らの仕事は真実を明らかにすることじゃない。ふさわしい真実を取捨選択する仕事だ」

奈良坂「先輩何言って……」

吾妻「少年漫画のヒーロー気取りたいならよそでやれ。お前、刑事向いてねーよ。さつさとやめちまえ役立たず」

吾妻が奈良坂の肩を押しつけて部屋を出て行く。

呆然とする奈良坂。

○（奈良坂の回想）古諏訪警察署・喫煙室
（日替わり）

吾妻がタバコを吸っていると、奈良坂
が段ボール箱を抱えて入ってくる。
疲労が溜まった表情。

奈良坂「お世話になりました」

と、頭を下げる。

吾妻「おう」

と、肩を叩いて灰皿にタバコを潰す。
奈良坂は頭を下げたまま悔し涙を浮か
べている。

（奈良坂の回想終わり）

○奈良坂の家・リビング（夜）

奈良坂「ただいま」

泉「おかえり……」

ソファで妻・奈良坂泉（35）に宥め
られていた娘・奈良坂千夏（8）が再
び泣き出して奈良坂の所に走ってくる。

奈良坂「どうした千夏」

千夏「（泣きながら）パパ警察だったんでしょ？ 墨斗くんの犯人捕まえてえー！ー！ー」

奈良坂はなんの話か理解できず戸惑いながら、とりあえず頭を撫でる。

× × ×

夕食を食べる奈良坂。

泉は一緒に座ってお茶を飲む。

千夏はいない。

泉「港区の事件見た？」

奈良坂「うん」

泉「亡くなったご家族がね、千夏の友達なの」 25

奈良坂「え……」

泉「あっちに引っ越しちゃって家は遠くなっただけど、この前も一緒に遊んで『またね』って言ったばかりだったの。なんでこんなことに……」

と、涙ぐむ。

奈良坂がティッシュで泉の涙を拭く。

泉「ありがと」

奈良坂はいたたまれない顔で、自分の

足に爪を立てる。

泉「東京の警察もすぐ捕まえてくれるよね？」

古諏訪の時みたいに―

奈良坂「……必ず捕まえるよ―

と、立ち上がる。

○長野・吾妻の家・和室（夜）

仏壇の前で手を合わせる吾妻（５５）。

仏壇には優しく微笑む妻・吾妻美枝子

（５１）の写真。

吾妻「俺はお前と同じ所へは行けないだろう

な……

その時、スマホに着信がかかる。

慣れない手つきで電話に出る。

吾妻「もしもし？」

○長野・居酒屋・店内（夜）

奈良坂「お久しぶりです。急に連絡してすみ

ません―

吾妻「悪いな、わざわざこっちまで来てもら

って。今東京に住んでんだって？ 嫁さん

元気か？」

奈良坂「はい。子供も生まれて、今8歳です」

と、スマホで写真を見せる。

吾妻「おー目元がお前にそっくりだ」

奈良坂「聞きましたよ。今刑事部長だって」

吾妻「病気で嫁さん亡くして、仕事の辞め時
も見失って、気づいたら無駄にデッカい肩
書きだけが残ってた」

奈良坂「今日はそのデッカい肩書きを頼りに
きました」

吾妻「……だいたい検討はつく。お前、あの
時と同じ目してるから」

と、奈良坂の両目を指さす。

奈良坂は一呼吸おいてから話し出す。

奈良坂「港区で起こった例の事件……殺され
たご家族が娘の友人なんです」

吾妻の瞳が揺れる。

吾妻「そうか……それは辛いな」

奈良坂「俺が殺したも同然です。俺があの時

逃げたから。真犯人は今も野放しです」

吾妻「……何言ってた。古諏訪の犯人、竹内はちゃんとムシヨにいんだろ。今回の件とは関係ない」

奈良坂「犯人捕まえてって娘に泣きつかれた時、思い出したんです。竹内を移送する時に来てた竹内の弟の顔。竹内に罪被せて、家族めちゃくちやにして。そんなことまでして守らなきゃいけないものなんてこの世にないですよ……？」

吾妻「お前は変わってねーな。少年漫画のヒーロー気取るなら」

と、言っている途中で、

奈良坂「少年漫画のヒーロー気取るならよそでやれ、ですよね」

吾妻「覚えてんなら言わせんな」

奈良坂「力を貸してください」

と、頭を下げる。

吾妻「お飾りとはいえこれでもまだ一応警察やっつてんだよ。うちに楯突こうとしてるや

つに手なんか貸すわけねーだろ」

奈良坂「じゃあなんで会ってくれたんです

か？ 何の話か分かってたんですよね？」

吾妻「元後輩が下手やかさないように釘刺そうと思ったんだよ。俺にまで火の粉飛んできたら困るからな」

奈良坂「とか言って、先輩はいつだって自分のことは後回しじゃないですか。あの時も、俺を組織の隠蔽に巻き込まないために、あえてキツイこと言って追い出してくれたんですよね」

吾妻「どこまでもおめでたいやつだな。本当に向いてないと思ったから言っただよ。全部本音だバーカ」

奈良坂「どうか俺に力を貸してください。竹内は今も刑務所の中です。失った時間は取り戻せないけど、この先の未来は守れる。罪を償わなきゃいけないのは真犯人と、俺たちじゃないんですか？」

と、訴える。

※ ※ ※

（フラッシュ）

病床の美枝子（51）。

美枝子「ねえあなた。これからも、困ってる人を助けてあげて。あなたは私の誇りよ」
と、吾妻（52）の手を握る。

※ ※ ※

吾妻はまぶたの裏に美枝子の姿を思い描く。

奈良坂「明日、古諏訪の駅前で待ってますから。飲み代は立て替えといてください。明日返します」

と、宣言して店を後にする。

吾妻はフツと笑って、

吾妻「払わんで結構だよ。もし明日行ったら、俺がケチみてえじゃねーか」

吾妻M「なあ美枝子。今さら遅いかもしれないが、俺はやっぱりお前が誇れる男でありたいな」

と、酒を流し込む。

○ある豪邸・リビング（夜）

ドアを開けて阿部美里（49）が帰ってくる。

阿部樹「おかえり」

と、息子・阿部樹（22）が出迎える。

美里「へ嬉しそうにーえ、なんで！？　しばらく帰ってこれないって言ってたのに！ー

阿部樹「母さんを驚かせたかったんだ。どう？　ビックリした？ー

と、ワクワクした顔。

美里「（愛おしそうにーうん、ビックリしたー 31

阿部樹「やった。作戦成功」

美里「ごはんは？　食べて来た？ー

阿部樹「まだ。久しぶりに母さんのご飯食べたくてー

美里「そんなことしてくれるの樹だけね。ちよっと待っててすぐ用意するからー

広々としたリビングには大きなテーブル。

中央には花が飾られ、手入れが行き届

いている。

棚にはいくつもの写真立てが飾られている。

写真はどれも阿部樹のものばかり。

美里、アイランドキッチンで手を洗う。

阿部樹「兄ちゃんは？ 相変わらず？」

美里、手元を見たまま、

美里「（手元を見たまま）うん」

○同・一室（夜）

美里、夕食を乗せたトレイを持ってドアを2回ノック。

美里「（よそよそしい）司？ ご飯置いておくね」

中から応答はなし。

ドアに耳を当てるが人の気配がない。

美里「司？ いないの？」

美里、恐る恐るドアを開ける。

モノトーンで統一された部屋。

物は少ない。

本棚の本は大きさや色で理路整然と並ぶ。

美里、怪しいものを探すように部屋の中を巡回する。

デスクの上の文具やノートも真っ直ぐに並べられている。

ノートをパラパラとめくるが中には何も書いておらず、ノートを戻す。

続いて、デスクの引き出しに手を伸ばす。

ゴクリと固唾を飲んで引き出しを開けようとする、

阿部司「どうしたの母さん」

と、いつの間にか背後に・阿部司（29）が立っている。

20代くらい、口元にホクロがある色白の好青年。

美里、瞬時に手を引っ込めて

美里「ううん別に！」

と、デスクから離れる。

阿部司「勝手に触らないでもらえる？」

美里「（震えながら）お母さん何も触ってないわよ？」

阿部司、デスクの上のノートの位置を直して、

阿部司「（ニコツと笑って）触らないでね？」

美里「（怯えながら）ご、ごめんなさい。もうしないから」

阿部司「そんなに怯えないでよ。ねえ、母さん」

と、美里の肩を触って不気味な笑みを浮かべる。

※ ※ ※
（フラッシュ）

玄関で雨と血で濡れた黒いカッパを着た阿部司（20）が、達成感と興奮で昂った表情で立ち尽くす。

※ ※ ※
美里はかつての阿部司を思い出して冷や汗を流す。
（了）